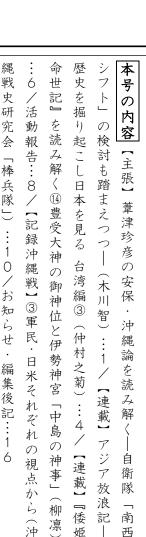
シンパとして左翼運動を支援し、昭和六年(一九三

一)には治安当局に検挙されるまでに至る。

造日本社」同人や右翼・民族派の諸氏と交わりつつ、

翌年の血盟団事件後、葦津は思想を一変させ、「改





1部

1000円

(別途送料 160 円)

主張

葦津珍彦の安保・沖縄論を読み解く―自衛隊「南西シフト」の検討も踏まえつつ―

「神苑の決意」 主筆 木 川 智

自身は共産党に入党することはなかったが、一種のは、社会主義の文献に耽溺し、当時の「革命家」たは、社会主義の文献に耽溺し、当時の「革命家」たは、社会主義の文献に耽溺し、当時の「革命家」たちと交流するなど、左翼思想に傾倒していた。葦津鉱業ちと交流するなど、左翼思想に傾倒していた。葦津鉱業明治四二年(一九〇九)、葦津珍彦は福岡県筥崎に明治四二年(一九〇九)、葦津珍彦は福岡県筥崎に

運動を展開する。
東条英機政権の言論統制への抵抗など独自の民族派に言論活動を展開し、三国同盟批判やナチス批判、義弟・幡掛正浩とともに設立した「葦牙寮」を拠点

国神社や伊勢神宮に関する政教分離問題などについいる神社・神道への解体的司令の発出を見越し、全はる神社・神道への解体的司令の発出を見越し、全はる神社・神道への解体的司令の発出を見越し、全はる神社・神道への解体的司令の発出を見越し、全地社本庁機関紙「神社本庁の各役職に就任する他、国神社本庁機関紙「神社本庁の各役職に就任する他、国神社本庁機関紙「神社本庁の各役職に就任する他、国神社や伊勢神宮に関する政教分離問題などについた。

は有名である。 鶴見俊輔らに一目置かれ、彼らと交流を深めたこときな反響があった。なかでも葦津が『思想の科学』きな反響があった。なかでも葦津が『思想の科学』で積極的に発言していく。そうした葦津の言論は、

葦津珍彦の「沖縄への視点」

「時局展望」にて「沖縄の同胞は起ち上がった昭和三一年(一九五六)六月三〇日付一面囲み記事沖縄の状況に心を痛めている。葦津は「神社新報」葦津は戦後早い時期より、米軍施政権下にあった